寒人閑話

一、　読み方

本の読み方に二つある。

自然科学は外から眺めて、自分の考えを入れない。

文化精神科学的なものは自らを含めて読む。

思想ものを読む時には、自分自身もその中に含み入れて、読むものと読まれるものと一つとなり、読みながら読む自身の運命を見出してゆかねばならぬ。

・・現実は大きな一つの全体なのであるから、自分だけ現実の外に立って傍観することは出来ない。・・

（三十年図書館報記事　校長の五分間朝礼の話から）

二、　自分の顔

道を歩いていて、向こうから自分の顔ソックリの男が歩いて来たとして、アッ自分が来たナとためらいなく立ち止まるだろうか。僕には、その自信がない。これが外ならぬ自分以外の何物でもない顔だと言えるだろうか？　毎朝顔を洗う度に鏡で対面していて、決して疎んずるつもりはない。出来ることなら、沁みじみとした強い親近感、否それ以上のものを持ちたいはずなのだが。

昨年の秋、僕の居合の写真を、八ッ切り版で受け取った時は、別に何とも思わなかったが、後日、米寿の会に招かれて、会場正面に、大きく引き伸ばした額入の写真に近寄って見ると、何と自分の顔らしい。苦渋に充ち刻まれ、悲痛と言えば、まだ少しは残るだろう明るさも全くない、暗い救いのない表情だった。ショックだ。　（この写真は前年の夏、家族全員三十名程集まった時に、曾孫達に祖父ちゃんの元気なところを見せてやろうと、すぐ隣地の天満宮の広場をお借りしての居合い抜きの真似事であった）

病後のヨロメク足腰をやっと支えての故もあったろうが幾十年こんな救いのない無惨な顔を包みかくして、厚顔にも世間様の前に自分を曝して来ていたのか！　地獄行き今現に地獄に向かって堕ちつつある亡者の顔だ。堕ちて行く地獄を断ち切ろうとして！

三、　宿業

八ッ切版の写真では、何気なく見た自分の顔の皺や細い刻みが、大きく引き伸ばされて、はじめて、はっきり自分

の眼で見ることが出来た。生まれてから今日まで、照る日、曇る日、寒いにつけ、暑いにつけ、怒ったり泣いたりわめいたり愚痴妄念の限りを盡くしてきた、その日、その日の生活の陰影、しこり、ゆがみの積み重なりが、次第に固まり、何時の間にか、自分でも知らない自分というものが出来上がり、毎日出来上がりつつ、生きて来ているのであろう。その背後には、先祖代々の幾百年、更にその奥に限りなく、昨日が今日を生み、過去が現在を造り、無限の人生苦という荷物を背負ったままの自分は、いったい何処へ向かってゆかねばならぬのか 。 そして今更投げだそうにも投げ出しようのないこの結果を、 自業自得として、今の自分そのものとして引き受けるかどうか、 嫌だ。 引き受けないと頑張ろうにも、頑張り自身がそのまま自分の顔の刻みを一層深くするばかりではないか。

後でこの写真を、古くからの親友に見せたところ、即座に「お前は二重人格だ」とあっさり宣告された。言われて見ればその通りかも知れぬ。生まれてはじめて目が醒めるように対面した自分の顔。外ではこの世間に籍を置き、内には地獄の住民に外ならぬ自分！

四、　舌切雀

こゝで舌切雀の昔話を思い出す。日頃人の良いお爺さんが、意地悪お婆さんに、糊をなめたといって舌を切られた雀の宿へお見舞いにいって、宝物を貰って来た。お婆さんも私も貰うと行って出された大小の袋の大の方を選んで背負って帰る途中、あんまり重たいので開けて見ると中から出て来たのは、なんと石や瓦どころか、鬼や蛇や種々な魔物妖怪がゾロゾロ。

おじいさんとおばあさんを一人の人間の一生の外と内とに見直してみてはどうだろうか。お爺さんお婆さんの背負って来た荷物は善かれ悪しかれ、宝物にせよ魔物妖怪にせよ一朝一夕に出来たものではあるまい。恐らく何時の頃からの自他の世界を引きくるめての自業自得の結果（宿業）と納得（自覚）する外はないのではないか。

自業自得痛くきびしい言葉だが、そうするより外に生きる道が無いギリギリの現実ではないか。その限り自分は毎日、心ならずも種々な形で、雀の舌切りをしながら、やっと自分の生をつないで来ているのではないのか。近頃の「い

じめ」の問題にしても、自分の言動以前に、自分という存在そのものが、既に周囲への強い「いじめ」になっていることもあるのではないだろうか。

窓を開けて空を仰ぎ、ホットした。

冬には珍しく晴れた空に、月は高くかかり、連日降りつもった雪の大地に、月の光が一ぱいに下り深く宿り、キラキラと輝いている夜。

『久慈高校同窓会誌』寄稿

昭和六十三年三月